

カッセル・グリム兄弟博物館での研究と滞独生活

人文学部准教授 和田 達 宣

2005年10月1日から2006年9月30日まで、長期在外研究の機会を与えられ、独・カッセルのグリム兄弟博物館の客員として充実した研究生生活を送り、同博物館の研究事業や企画業務にも微力ながら協力することができた。

[研究環境]

カッセルはグリム兄弟のメルヒェン集が誕生した地である。世界のグリム研究にあって中枢機関の役割を担うグリム兄弟博物館はカッセルの市街地にある。展示部門があるベルヴュー宮は兄弟の著業を展観する多数の手稿や遺品などの一次資料とドイツ文学の中世から近代までの作品のテキストを集めた5万冊の書籍を所蔵する。ベルヴュー宮から隣接する近代博物館を通り過ぎて徒歩5分の距離にあるグリム兄弟広場には博物館の総務・文書資料部・図書部がある。



グリム兄弟博物館ベルヴュー宮：南側(左)・北側(右)

ここにはグリムのメルヒェン集や伝説集の分野を中心に、ユネスコ指定の世界記録遺産17点を含む幾多の超一級資料と10万冊に及ぶ一次・二次文献を所蔵する。なかでもメルヒェン集の

各種刊本の収集は見事で、グリム生前の各版(1813 - 1858)はもとより、版権の切れた1893年から今日までに出版された膨大な数のドイツ語版と、翻訳版としては初のデンマーク語版(1820年)から一昨年に初めて刊行されたヴェトナム語版まで、全部で160言語の刊本が壁面書架の一つを満杯にしている。

総務・文書資料部・図書部が入居する建物は19世紀末の重厚な石造建築で、「ヒルデブラントの歌」や「ヴィレハルム」他の中世写本の多数のコレクションで知られるムルハルト図書館、ヘッセン州立図書館、さらにカッセル大学図書館(分館)とで複合図書館を構成する。



グリム兄弟博物館：文書資料部・図書部

在外研究期間中、文書資料・図書部に専用デスクを提供され、平日はここに架蔵された図書資料の中から必要な文献を取り出して自由自在の研究ができた。文献の複写と持ち出しも当方の良識に任かされ、夜間や週末でも何の不便も無く継続的に仕事できた。

[居住環境]

カッセルは封建君主の都として繁栄してきたところで、由緒ある文化施設が数多く集積する。これは歴代の君主が学問文化を手厚く保護奨励

した結果である。全く幸運な巡り合せというか、市街地の中心で、都市広場としてはドイツ最大、ヨーロッパ全体でも最大級といわれるフリードリヒ広場（Friedrichplatz）に面した所に家具調度一切完備の賃貸を地元紙の住宅情報で見つけ、直ぐに家主に連絡した。夕方にその家主と待ち合わせて物件の下見をし、その場で入居契約を済ませた。何しろ願ってもいかなかった好立地で、グリム博物館までは徒歩で5分の距離である。住宅は広さ55㎡の1LDKで細長い5階建のオフィス・ビルの最上階にある。階下は内科の診療所、その下は会計事務所、1 - 2階は携帯電話O₂の店舗が入居する。夜間の住人は他に無く、静寂が保障され、外玄関はシャッターも下ろせるため防犯上も安心して過ごせる。

建物を出た左手の目の前が電停とデパート、大型ショッピング・モール、右手は老舗菓子店のカフェ、玄関前はカジュアル・レストランで食事は早朝から深夜まで可能である。とにかく、生活や買い物の面での便利さも絶大である。



入居先：左の建物

内装の面も半端ではなく、細かいところまでよく配慮されている。作り付け収納家具と配置家具は同一メーカーのすっきりデザインされたシリーズもので統一され、全てが天然空であるために温かみを感じさせる。各室のカーテンやカーペット、スタンド照明などは落ち着きが重視され、居心地のよい空間を効果的に生み出している。キッチン設備はレンジ、冷凍・冷蔵庫は当然として、コーヒーメーカー、トースター、オープンからパン釜、電動スライサーまでである。

鍋とフライパンはFissler、刃物はWMF、食器はFriesland、グラス類はNachtmannのハーフセットが調い、インテリアに道具美を付加した若い家主夫婦の粋な趣味を感じさせる。これら所帯道具を自分で買い集めたら、時間は1ヶ月あっても足りない。全く至れり尽くせりの調度のおかげで、時間を浪費せず、入居早々から研究やフィールドワークに専心することができた。



フリードリヒ広場電停前：夏の午後（左）・クリスマス市（右）

[研究生活]

午前から午後にかけては博物館での調べ物、その後は自宅に持ち帰った資料と文献の精読が普段の生活パターンとなった。2点間の距離は電停で一つ分、自宅からだとの目抜き通り、ケーニヒシュトラーセに沿って西方向に行く。途上に書店が2軒、横道に入って回り道をするとなりに3軒ある。書店での道草は禁物であるが、個人としても持っておきたい文献は注文すれば、翌日か、翌々日には届いている。



電車通り：フリードリヒ広場⇔グリム兄弟広場

ケーニヒシュトラーセは一般車両の通行が終日禁止されているため、自宅は車の騒音や排気ガスとは無縁である。筆者の前住人は単身赴任の判事で、ここを週日の居宅としていたという。その判事は半月前に離任するまで居間の窓側に

大型机を置いて使っていた。その位置からだと、18世紀に造営されたバロック様式の芝生広場を挟んでヘッセン＝カッセル方伯の市城門（遺構）とフリードリヒⅡ世（1720 - 1785）によって建設されたフリードリヒ博物館（Museum Fridericianum）が見える。この博物館は公共の博物館として構想されたヨーロッパ最初の建造物として、また、グリム兄弟が図書館員として15年に亘って勤務し、研究したところとして知られる。第二次大戦の戦禍で殆どが消失したが、彼らが働いていた図書部門は最終的には35万冊の貴重文献を所蔵したという。窓辺に立つと広場全体（340x112m）が見渡され、フリデリツィアーヌムの右手には（ドイツ最初の常設芝居劇場として建設された）オットネーウム（Otto-neum）自然史博物館と今の州立劇場が並ぶ。広場は南に向かって開け、先は離宮（Orangeire Schloß）の内苑と広大な外苑である。



フリードリヒ博物館

広場は夜間、美しくライトアップされる。居間の仕事机に着いていても寝室に入っても、窓越しにはフリデリツィアーヌムの夜景が常に見えている。『子どもと家庭のメルヒェン集』以降、『ドイツ伝説集』、『ドイツ語文法』、『ドイツ伝説集』などの著業に勤しんだ彼らに思いを馳せながら、この望外の環境がグリムに係わる我が身に与えられたことを幾度となく感謝した。
[2005年という年]

2005年はH. C. アンデルセンの生誕200年、また、フィーマン夫人の生誕250年でもあった。ドロテア・フィーマンはカッセル近在の出身で、グリム兄弟の多数のメルヒェンを提供して

貢献をした。兄弟はメルヒェン集第2巻の扉を彼女の肖像画で飾って感謝の念を表した。グリム博物館では記念年に合わせ「アンデルセンとグリム」、『フィーマン夫人生誕250年』の特別展を開催した。こうした企画展の現場業務を体験できたことも幸運な巡り合わせと感じている。

カッセルでの濃密な1年は学部、学科の先生方、事務局の方々、グリム博物館の方々のお蔭である。この場を借りて心から感謝したい。



グリム兄弟広場と兄弟の銅像



[参照]

次の Web サイトからオンデマンドでカッセル市内約40箇所のパノラマ映像を見ることができます：

<http://www.stadtpanoramen.de/kassel/kassel.html>

<http://www.kassel.de/cms02/stadt/>

ベルリン滞在で感じたこと

商学部教授 木 幡 伸 二

私は2005年9月からの1年間ドイツのベルリンに滞在した。本稿では、ベルリン滞在中に体験したことや感じた事柄をいくつか紹介したい。

1. FHTW について

お世話になったのは、Fachhochschule für Technik und Wirtschaft Berlin (略称 FHTW、ベルリン技術経済専門大学)の副学長、Klaus Semlinger (ゼムリンガー)教授である。ご存じの方も多いと思うが、ドイツの大学には、「総合大学及びこれに準ずる大学」、「専門大学」、「芸術系の大学」という3種類がある。専門大学は、DAADのホームページによると、「科学技術の進歩に合わせて将来の職業人の資質を高めるために、1960年代後半から1970年代前半にかけて連邦州により設立」されたもので、「経済産業界で求められる実践力に対応できるアカデミックな教育を提供する役割」を担っている、と紹介されている。修業年限は4年であり、企業が即戦力として期待する技術や経済の分野に特化した学生を育てている。ベルリン市には、このような専門大学がいくつかあり、FHTWはその中で最も規模が大きいようである。

私がこのFHTWを選んだ理由は、いくつかあるが、今回の研究のテーマがドイツの自動車産業の対中戦略であり、WZB出身でドイツ産業界との幅広いコネクションをもつゼムリンガー教授の助けが不可欠だったからである。また、同大学は、旧東ベルリンの一角にあり、再統一後に市場経済化が進む地域としても魅力的

であった。更に、ゼムリンガー教授は私がお世話になる1年前に財務担当の副学長に選出され、秘書付きの副学長室があるため、自身の研究室を私に使わせてくれた。財政事情の厳しいドイツの大学で、外国人研究者が一般の教授用の研究室を貸してもらえるのだから、このような幸せはなかった。

2. ドイツ語の「壁」

ところで、私は当初、研究者や専門家との意見交換なら英語で十分、ドイツ語は文献を読むことができるようになればよい、と軽く考えていた。確かに、FHTWの教授は皆英語が堪能で、問題はなかった。

しかし、住民登録、外国人局でのビザ取得、銀行口座の開設、電話・インターネットの接続などは、そう簡単には行かなかった。特に、ひとたび問題が発生すると、ドイツ語なしでは先に進まない。特に、ドイツテレコムとの繋がらないインターネットにはほぼ3ヶ月苦しんだ。私にとっては、まさにドイツ語の「壁」だった。

9月にはFHTWの短期コースで2週間ドイツ語を勉強したが、一念発起、民間のドイツ語学校に通って、ABCからやり直すことにした。しかし、いざとなるとドイツ語は難しい。おまけに、衰えて久しい記憶力と視力、生活習慣の違い、クラスメートとの年齢的・精神的ギャップなどが、再び「壁」として立ちちはだかった。

3. ドイツ語はやさしい？

私のクラスメートは国籍も西ヨーロッパ、北欧、旧東欧・旧ソ連、中南米、それに日本などのアジア、と兎に角多様であったが、そこで痛感したことは、アジア人にとってドイツ語は非常に難しいということだ。特に、タイやベトナムの人などは、発音から苦労していた。

逆に、欧州の言語を母国語とする人々は最初から大きなアドバンテージをもっている。それらの言語は、ドイツ語と同じラテン語を祖先としているからだろう。悔しいことに、抽象的な概念になればなるほど、彼らにとっては理解が容易なようだ。

4. ベルリンの移民社会

ドイツは第二次世界大戦に対する反省から、移民を積極的に受け入れている。中でも、ベルリン市の外国人数は主要都市中最多である。

同市の外国人社会で一大勢力を誇るのがトルコ系住民である。旧西ドイツが労働力として政策的に受け入れた結果といわれている。市内の至る所に「インピス」というトルコ系の軽食スタンドがあり、長時間営業もあって大変重宝がられていた。また、隣国であるポーランドからの移民も比較的多く、EU域内からの移民では最多である。ポーランド系住民は、余り目立たないが、EUの東方拡大の象徴的存在である。

しかし、私にとって意外だったのは、ベトナム系の移民が統計数字以上に目立ったことだ。主要な駅ビルなどには、ベトナム人経営の「中華料理」店や花屋が必ずあった。その背景には、旧西ドイツのトルコ移民同様、旧東ドイツ時代の労働政策の結果があるようだ。

5. ドイツ語が分からない？移民との摩擦

当然のことながら、移民に関する問題も多い。「ネオナチ」などによる外国人排斥などもその一つである。このような摩擦の背景には雇用問

題がある。ドイツ全体の失業率は2006年9月の数字で8.1%、旧東ドイツ地域では約20%で、このような不満が、移民に対して向けられるのだという。

言葉の問題もある。トルコ系住民の二世も12歳まで「基礎学校」に通うが、卒業後もまともなドイツ語が話せないという。教育相も関心を寄せている、とテレビで取り上げられていた。更に、ドイツの医療現場では、ドイツ語を話せない医師が増えているという。語学学校の先生の父親が脳梗塞で亡くなった。彼は東欧出身の担当医から父親の病状について説明を受けたが、全く意思疎通ができなかったという。ドイツでは医師の給料が低いため、ドイツ人医師はイギリスなどに行き、ドイツの病院では、東欧出身の医師が増えているとのことだ。大変悲しい事態であり、そこまでして移民に対して寛容である必要があるのか、疑問が残る。

6. 移民の流入は続く

ドイツでは、1970年代初頭に人口の自然増加率が減少に転じ、2004年には人口も減少し始めた。私の宿舎の近所でも、外で遊ぶ子供の数は少なかった。街を歩いても、ドイツ人の親子連れは少ない。これに対して、地下鉄などではトルコ系やベトナム系住民の家族連れが多数見られ、子供の数も多い。特に、トルコ系住民はドイツ社会にしっかり根を張っているようである。今後は、EUの東方拡大に伴って、ポーランドなどの新規加盟国や未加盟の中東欧諸国、ロシアなどからの移民も着実に増えてゆくものと思われる。ドイツの移民社会は、変質を遂げながら今後も拡大して行くであろうし、そこで発生してくる問題も多様化して行くであろう。

最後に、このような貴重な経験と研究の機会を与えて下さった本学ならびに関係者の方々に深い感謝の意を表わしたい。